

学生の保育実習への不安に関する検討Ⅰ —保育実習を通してどのように変化するか—

矢野 洋子・安東 綾子

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2021年5月25日受付、2021年7月13日受理)

要 旨

保育士養成においては、座学における指定単位の修得と実習が義務付けられている。実習は、座学と実学の往還性の原則の中で最も重要な理念とされている。しかし保育士を目指す短大生にとって、特に初めての实習について具体的なイメージを持ちにくい可能性のあることは、先行研究でも報告されているが、筆者らの短大においても学生への実習事前指導の中で、同様のことが推察された。そこで学生の実習に対する不安が、実習の前と実習を終えた後ではどのように変化するかを明らかにし、実習事前・事後指導のありかたについて検討するために、令和2年度の2～3月期に保育実習Ⅰを終了した学生にアンケート調査を行った。その結果、学生にとって、実習前は漠然とした不安や「日誌の書き方」、「手遊びや絵本読み」という保育技術についての不安がほとんどであり、実習中になると「子ども達や利用者との関わり方について」など、「障害児保育」や「保育内容 人間関係」などに関連するより具体的な内容になることが明らかになった。つまり実習前には、「実習指導」やすべての保育関連科目の授業において、学生が実習をイメージできるような内容をできるだけ取り入れたり、見学実習やボランティア活動などを取り入れたりすることが有効であり、実習中に感じた子どもへのかかわり方や対応、支援方法についての疑問点については、実習後に実習事後指導だけではなく、該当する授業の中で具体的にどのような方法があるのかを講義や演習を通して学んでいくことが重要であると思われる。

キーワード：保育実習Ⅰ・保育実習の不安・保育関連科目・障害児保育・人間関係

1. はじめに

保育士養成においては、座学における指定単位の修得と実習が義務付けられている。「実習指導の理念とミニマムスタンダード策定の意義」において、実習は、座学と実学の往還性の原則の中で最も重要な理念とされている¹⁾。つまり、医療、看護などと同様に対人関係を主軸とする職業の専門性を身につけるためには、養成校の座学で学んだ内容を保育所や施設等で実際に体験することの積み重ねによって構築されていく。保育士を目指す学生にとって実習はまさにその第1歩になるといえるであろう。

2017年に改訂された保育所保育指針は「第1章総則—1において、「保育所における保育士は、児童福祉法第18条の4の規定を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものであり、その職責を遂行するための専門性の向上に絶えず努めなければならない」と述べている。実習はまさに「倫理観に裏付けられた専門知識」と「技術」「判断」はどのようなことであるかを、実践的に学ぶという深く重い目的を持っている。

そのような目的を理解した上で、短期大学では2年間で、基礎科目から専門科目の座学と実習を行わなければならない。

2017年の保育所保育指針改定に伴い、実習内容の一部が改正された。その改正内容は以下の5点が特徴として挙げられる¹⁾。

1. 保育実習Ⅰ（必須科目）の実習施設として記載されている児童発達センターについて、「児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る」という記述が削除されたこと
2. 指定保育士養成施設と実習施設との間で、保育実習計画の内容（全体の方針、実習記録、評価等）を共有する事が明文化されたこと

3. 指定保育士養成施設における主たる実習指導者は他の教員と緊密に連携し、実習指導を一体的に行うことが明文化されたこと
4. 実習施設における実習指導者は主任保育士又はこれに準ずる者をあてることが明文化されたこと
5. 実習施設における主たる実習指導者は該当実習施設内の他の保育士等と緊密に連携することが明文化されたこと

以上のような特徴を持って、保育実習実施基準が改定されたものの、保育実習の目的については変化がないという事が言える。つまり、内容が改正されたとしても、保育実習は養成校の講義・演習から学んだ知識技能を基礎として、保育の現場においてそれらを総合的に実践できる応用的能力を養い、子どもや利用者に対する直接的な関りを通して実践能力を培っていくという重要な位置であることには変わりはない。しかし、一部のボランティアや見学の経験のある学生を除いて、「実習」の具体的なイメージを持つことは、多くの学生が難しいと感じている。それは先行研究（岩崎2009）においてもあるように、まだ学生にとって具体的なイメージを抱きにくいことが明らかになっている²⁾。筆者らの短期大学の学生も、初めての保育実習に行く前は、実習そのものへのイメージをもったり理解を得る事が難しく、実習指導の中でも具体的な質問などはほとんど出てこない。また、「養護原理」の授業の中で、児童福祉施設の詳細について授業を行うが、学生からの質問は「食事は残してよいのでしょうか?」「嫌いなものが出たらどうしたらよいですか?」「携帯は使えますか?」「お風呂は一人で入れますか?」「洗濯物はどうしたらよいですか?」など、特に宿泊実習における自分の生活に対する不安がほとんどである。そこで学生の具体的な疑問点を知るために、質問をすることの恥ずかしさなどの学生側の気持ちに配慮して、アンケート形式や個別の面談を行うなどの工夫を行っても、「わからないことが分からない」「何を質問したよいか分からない」という答えが多かった。また学生にとっては、事前の電話のかけ方や事前訪問時のマナー、実習において実習時間を守ることや、何かあったときの対処や連絡方法など、実習以前のマナーや社会人としての常識に疎い学生も多く、事前実習指導ではそのような内容がかなり必要であり時間的にも多く割かなければならないのが実情である。事前指導における筆者らの取り組みについては、「教育者・保育者養成の短期大学における実習に向けての初年次の取り組み」（安東・矢野2021）においても報告する予定である。また、筆者らの実習後の授業（「障害児保育」「保育内容（人間関係）」）で、特に実習でのエピソードや困った事を聞くと、実習前とは打って変わって、具体的なエピソードに関わる質問が増加することから、実習事後指導についての取り組みについても検討する必要があることは明らかであった。

そこで筆者らの短期大学において、学生の保育実習への不安が、実際の実習を通してどのように変化するかを明らかにするためのアンケート調査を行い、その結果をもとに、「倫理観に裏付けられた専門知識」と「技術」「判断」はどのような事であるかを実践的に学ぶことに焦点を当てて、実習事前事後の授業演習の在り方について考察をすることは必要不可欠なのではないかと思われる。

そこで、本研究は、保育実習 I を終了した短期大学学生 2 年生に、実習前と実習中の不安についてアンケート調査を行い、それぞれの不安内容を明らかにするとともに、その不安を解消するために、実習事前・事後指導を含めた関連科目の中でどのように取り組んでいくかについて、検討を行う。

II. 方法

令和 2 年度の保育実習は、コロナ禍のためクラスターが懸念される施設実習は、施設側の要請によりほぼ延期となっている。実施されたのは、児童発達支援センターなど 3 種別のみである。保育所の受け入れは、比較的良好であった。具体的には 2・3 月保育所実習は 53 か所 施設実習 I は 2・3 月で 9 か所 26 名が参加している。施設の種別は、児童発達支援センター、障がい者支援施設、児童養護施設の 3 種類であった。

新学期にいずれかの実習を終了した新 2 年生にアンケート調査を行った。

1. 対象

保育士資格を希望する短大 2 年生 85 名

2. 期間

令和 3 年 4 月～5 月

3. 実施した授業

障害児保育 ・ 保育内容「人間関係」

4. アンケートの内容

アンケートの内容は以下の内容である。

- ① 保育所実習に行きましたか
ア：はい イ：いいえ
- ② ①で ア：はい と答えた人は保育所名を記入してください。
- ③ 施設実習に行きましたか
ア：はい イ：いいえ
- ④ ③で ア：はい と答えた人は施設名を記入してください。
(以下の質問は単数回答か複数回答か記入)
- ⑤ 実習に行く前の不安*はなんでしたか。あてはまるものを選択・記入してください。
ア：実習全般
イ：気になる子ども・利用者への対応
ウ：子ども同士や利用者同士の人間関係やトラブルへの対応
エ：実習先の保育者との人間関係
オ：主な活動の部分実習の内容や実施
カ：手遊び・絵本読み
キ：日誌の書き方・メモの取り方
ク：指導案の書き方
ケ：安全管理について
コ：発達に即した援助の仕方について
サ：その他
- ⑥ ⑤で挙げた不安のなかで行く前までに解決したものは何ですか。あてはまるものを選択・記入してください。
ア：実習全般
イ：気になる子ども・利用者への対応
ウ：子ども同士や利用者同士の人間関係やトラブルへの対応
エ：実習先の保育者との人間関係
オ：主な活動の部分実習の内容や実施
カ：手遊び・絵本読み
キ：日誌の書き方・メモの取り方
ク：指導案の書き方
ケ：安全管理について
コ：発達に即した援助の仕方について
サ：その他
- ⑦ ⑥で挙げた解決できたものは、どうやって解決しましたか。あてはまるものを選択・記入してください。
ア：授業で取り扱われた
イ：実習の事前指導・集中講義
ウ：先輩や友達からの情報
エ：事前訪問での説明
オ：大学の実習担当教員への相談
- ⑧ 実習をとおして困ったことを選択または記入してください。
ア：気になる子ども・利用者への対応

- イ：子ども同士や利用者同士の人間関係やトラブルへの対応
- ウ：保育者の資質について
- エ：主な活動の部分実習の内容や実施
- オ：手遊び・絵本読み
- カ：日誌の書き方・メモの取り方
- キ：指導案の書き方
- ク：安全管理について
- ケ：発達に即した援助の仕方について
- コ：その他

⑨ ⑧で挙げた内容で実習中に解決できたものがあれば選択また記入してください。

- ア：気になる子ども・利用者への対応
- イ：子ども同士や利用者同士の人間関係やトラブルへの対応
- ウ：保育者の資質について
- エ：主な活動の部分実習の内容や実施
- オ：手遊び・絵本読み
- カ：日誌の書き方・メモの取り方
- キ：指導案の書き方
- ク：安全管理について
- ケ：発達に即した援助の仕方について
- コ：その他

III. 結果と考察

1. 実習に行く前に感じていた不安について

実習に行く前の不安については図1に示す。実習前に感じていた不安は「実習全般」が60名(71.6%)でトップである。次いで「日誌の書き方・メモの取り方」64名(75.3%)「手遊び・絵本読み」54名(63.5%)「実習先の保育者との人間関係」51名(60.0%)と実習での基本的な技術や実習生としての対応の仕方など、実習全般の中から特に想像できる内容や授業や友人・先輩から情報のあると思われる内容に、学生の不安の対象がむいていたようである。反面「気になる子どもや利用者への対応」33名(38.8%)「発達に即した援助の仕方」37名(43.5%)など具体的な保育の内容や支援についての不安感はあまり高くない。

この結果から、初めての实習であるだけに、具体的な疑問や悩みよりも実習に対する漠然とした不安が中心であったことが推察される。

特に今回アンケートを実施した学年は、コロナ禍の中で1年を過ごし、本実習の前に行われる「1日見学実習」も行うことができず、半日の見学実習を幼稚園で行ったのみであったため、従来の学生に比較してさらに実習へのイメージが持てないということが言えるであろう。また「日誌の書き方・メモの取り方」が次いで多いが、メールやラインというツールにはなじみが深く、さらに短文でやり取りをする生活習慣から、「記録」という観点から記述することが難しいことや、また、基本的な文章力が身につけていない学生が年々多くなってきている。そのため事前指導で行われるメモの取り方や、日誌の書き方の煩雑さ、量的な問題に不安を感じる学生が多いことが推察できる。

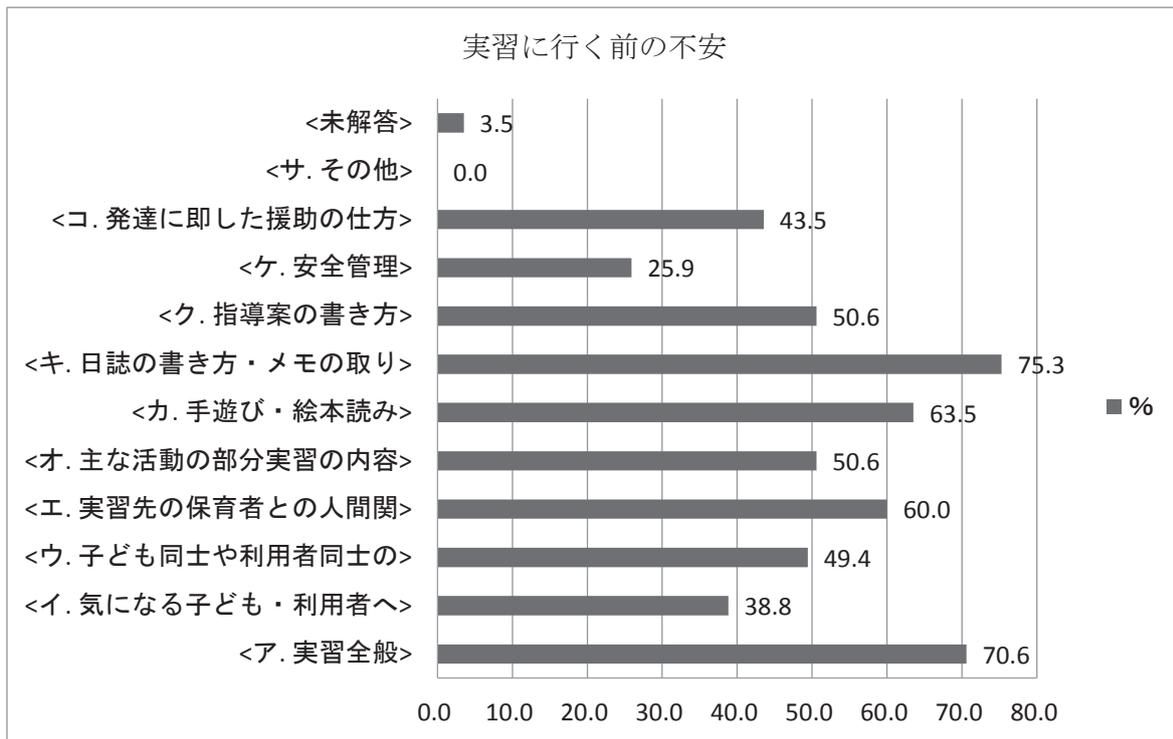


図1 実習に行く前の不安について

2. 実習にいく前までに解決した内容と方法について

実習に行く前までに解決した内容については図2、また解決できた理由については図3に示す。

実習にいく前までに解決できた内容は「手遊び・絵本読み」27名(31.8%)「日記の書き方・メモの取り方」26名(30.6%)「安全管理」11名(12.9%)がある。いずれも「授業で取り扱われた」39名(45.9%)「実習の事前指導・集中講義」28名(32.9%)で、合わせると67名(78.8%)と大部分を占めている。その他「先輩や友達からの情報」「事前訪問での説明」が16名(15.3%)を占めている。

実習に行く前に解決した内容の中で、「指導案の書き方」「日記の書き方・メモの取り方」「手遊び・絵本読み」については、授業の中で取り上げる内容であるため、授業の中での話題や学びが解決につながっていると思われる。特に「手遊び・絵本」などは「表現」や「子どもの歌」などの授業の中で取り入れることが可能であるし「保育実習指導」の中で行う時間をとるようにしている。短期大学の場合には、1年間の授業内容のみでは、本実習に向けて不足する内容もあり、そこを補完する形で「保育実習指導」を活用することが有効であると考えられる。

また事前訪問の際に、実習の内容やタイムスケジュールなどの説明や資料を渡してくれる実習園・施設がほとんどであり、具体的に理解ができるようになるのであろう。また実習現場を事前訪問で実際に確認することによりイメージが確立され、臨場感が生まれる事が考えられる。

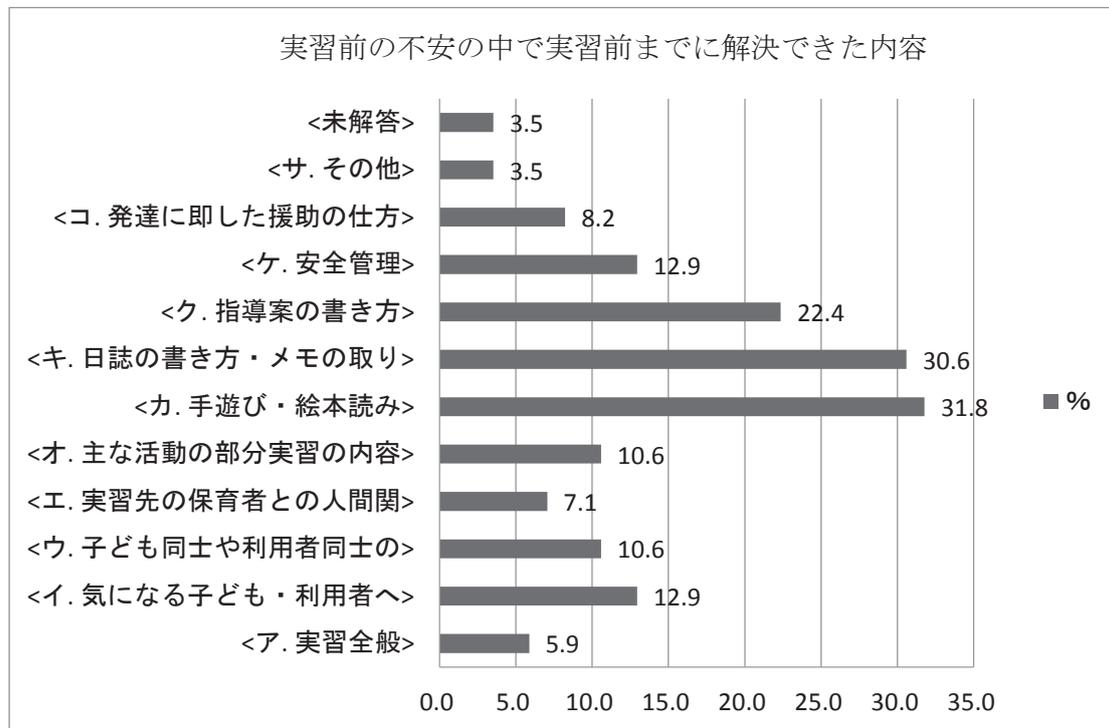


図 2：実習前までに解決できた不安の内容

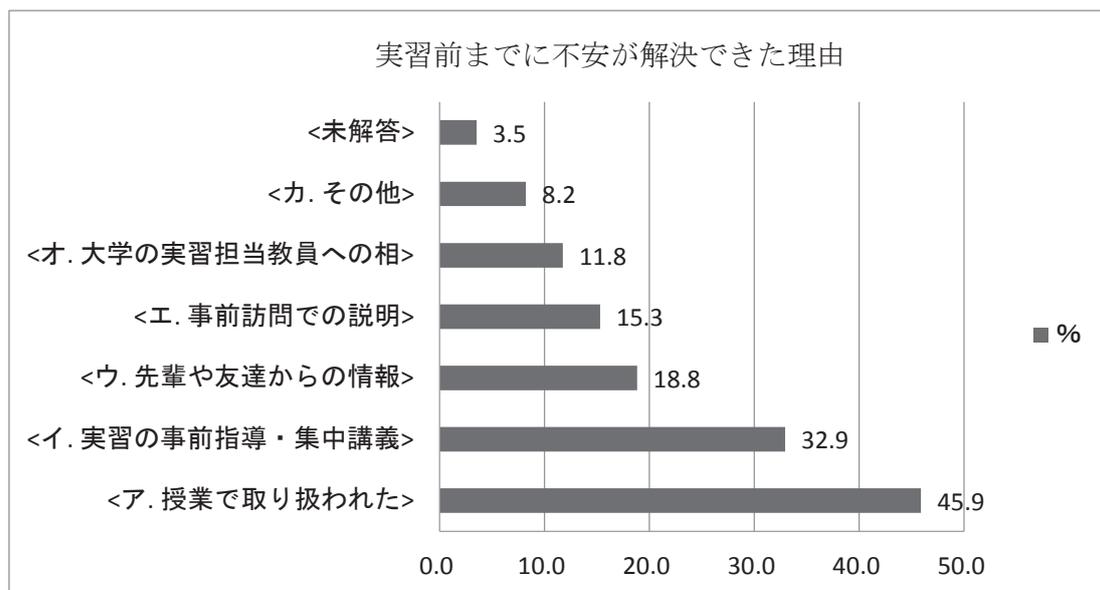


図 3：実習までに不安が解決できた理由

3. 実習を通して困ったこと

実習を通して困ったことについて図4に示す。

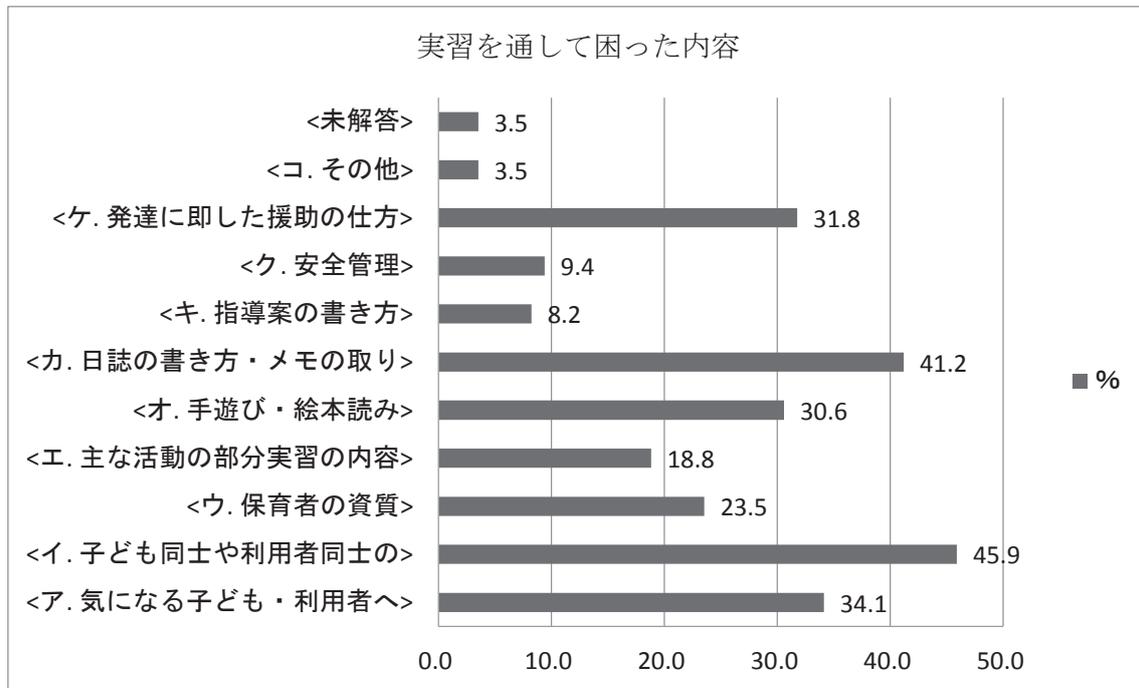


図4：実習を通して困った内容

実習中に困ったことは「気になる子ども・利用者への対応」29名（34.1%）「子ども同士や利用者同士の人間関係」39名（45.9%）で実習前に比較して増加がみられる。また「日誌の書き方・メモの取り方」35名（41.2%）と実習前に解決したと思われていたにもかかわらず、実際に実習を行ってみると、その場面をどのように日誌に表現するのか迷ったり、実習園によって日誌の書き方の指導が違ったりする場合もあり、新たな悩みになっている可能性が高い、さらに実習前に予想していた以上に日誌を書くことに時間がかかり、具体的には2時間～5時間かかる学生もいるようである。このように日誌を書くことは、学生にとって負担が大きく、慣れない実習中の疲労と重なり新たな困り感となったことが推察される。

また「気になる子ども・利用者への対応」「子ども同士や利用者同士の人間関係」については、実習で実際に子どもや利用者に関わることによりパニックやケンカなども含めて、授業で習ったこと以外の出来事や想像してなかったことも多く起こる。実習ではそのような場面に対応する事が当然求められるため、学生にとって大きな困り感を感じる事になる。

4. 実習中に解決した内容と方法

実習中に解決した内容については図5に示す。

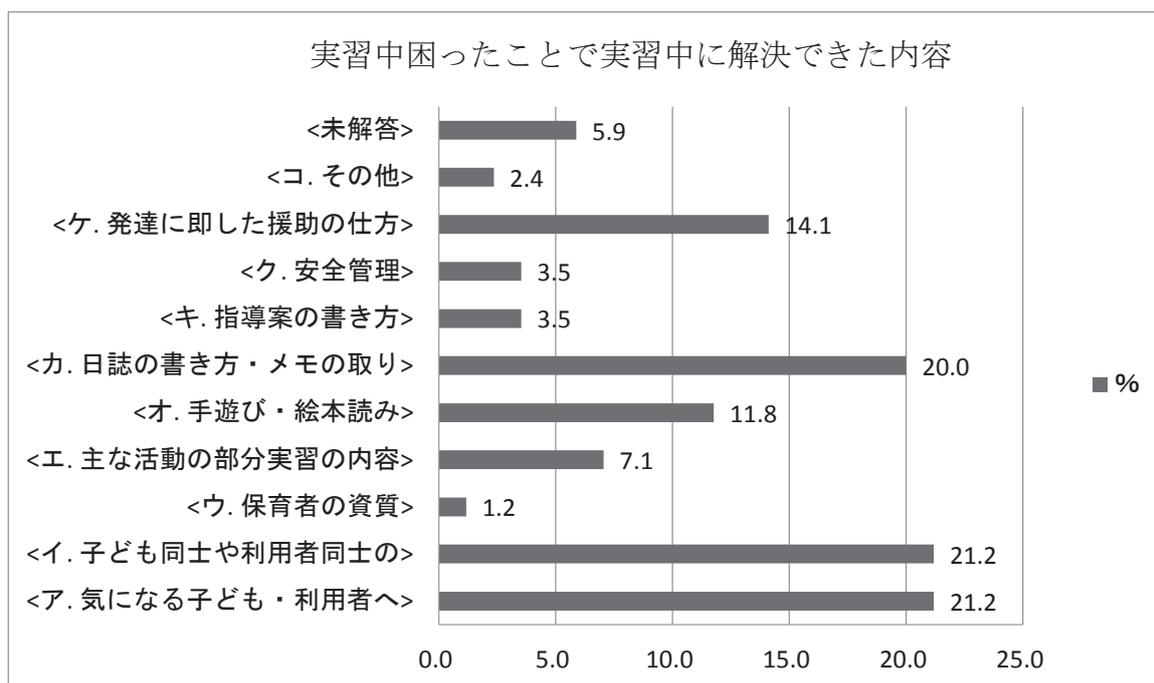


図5：実習中に困ったことで実習中に解決できた内容

4. の中で、「気になる子ども・利用者への対応」18名(21.2%)「子ども同士や利用者同士の人間関係」18名(21.2%)で「日誌の書き方・メモの取り方」17名(20.0%)については、実習中に解決した内容の中で割合が高い。それについては、実習中の保育者からの助言や実習の帰りに教員に確認できるため、学生の意欲が高く質問などで解決したり、実習中毎日の実習指導によって解決したりすることが可能であることが推察される。特に、「気になる子ども利用者への対応」や「子ども同士や利用者同士の人間関係」については、実際の保育士の対応を見る事や助言を受けることができることや、子どもや利用者の様子が間近で見れることなどから、支援の方法について実践的に学ぶことが可能である。また実習の日にちが経つにつれて、子どもや利用者に関わる時間を重ねることから個別の特性や興味関心などを知ることができ、相手への理解が深まり関係性が深まることから解決につながっていることも考えられる。また「手遊び・絵本読み」についても、実際の保育者の保育の様子から学ぶ事ができると同時に、前述にしたように子どもや利用者との関係性が深まったことにより緊張感も薄れることもあり、子どもや利用者との関わりの中で楽しい側面も出てくる可能性も高く、実習生の自信ややる気にもつながると考えられる。実習中は10日間ではあるが、クラスの子どもの利用者の方との関係性ができることにより、保育技術や支援方法にも良い影響を及ぼすということ、つまり「信頼関係」の基礎ができることの重要性を体感したと言える。事後指導や実習後の授業の中で、保育にとっていかに信頼関係が大切かを、そのような体験の数々を思い出させて実気づかせ伝えていくことが重要であろう。

IV. まとめと今後の課題について

以上の結果から、学生にとって実習前は漠然とした不安や「日誌の書き方」「手遊びや絵本読み」という保育技術についての不安がほとんどであり、実習中になると「子ども達や利用者の関わり方について」とより具体的な内容になることが明らかになった。

つまり実習前には、「実習指導」やすべての保育関連科目において、学生が実習をイメージできるような内容をできるだけ取り入れたり、コロナ禍が収束したのちには、見学実習やボランティア活動などを取り入れたりしていくことが必要であろう。

また実習中に感じた子どもへの関わり方や対応、支援方法への疑問点については、実習後に事後指導の中

でのみ行うことは限界がある。そのため該当する授業の中で、具体的にどのような方法があるのかを講義や演習していくことが重要であると思われる。

例えば、筆者らの講義「障害児保育」「保育内容人間関係」でとったアンケートによると、「気になる子ども」については、「気になる子どもがいた」という学生は61名もおり、「気になる子どもへの対応」は現場において喫緊の課題であることは昨今どの保育園、幼稚園でも言われていることを裏付けしている。その内容についても図6に示している。内容から、より実践力が必要であることが容易に推察される。また実習中に解決した学生もいるが、子どもへの対応は似たようなケースであっても、1人1人の状況によって決して同じではない。つまり本当に解決できたとは言えない部分もあるのではないだろうか。

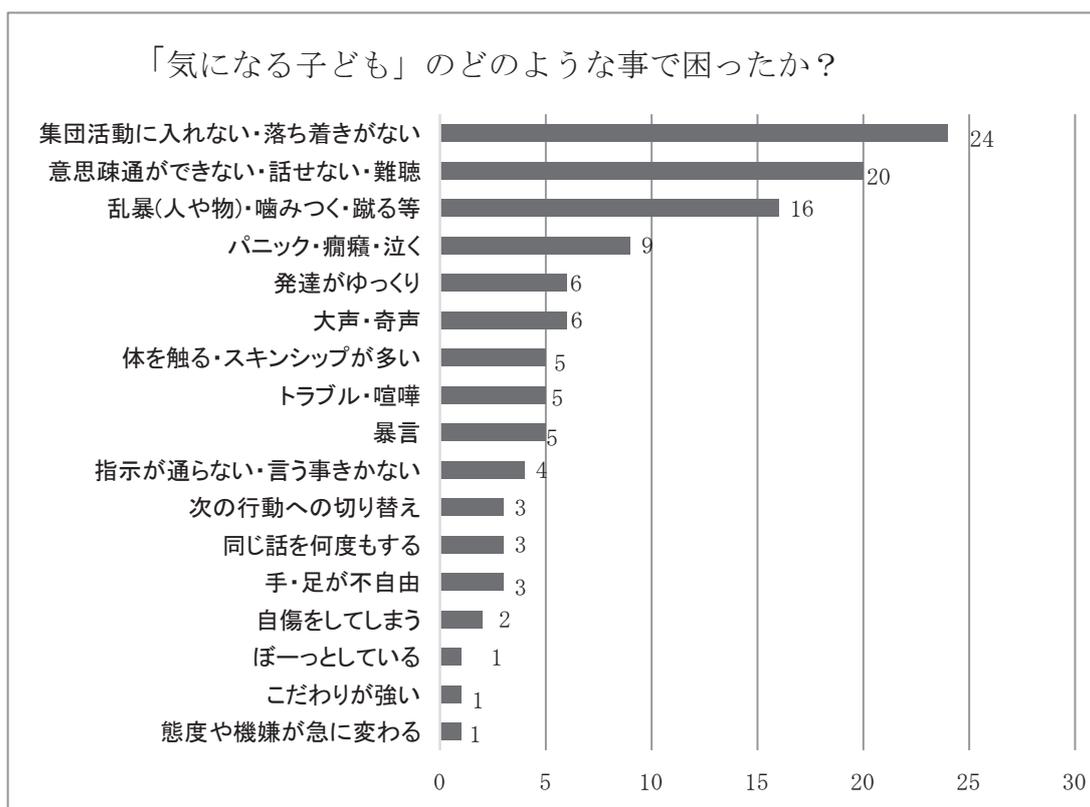


図6：「気になる子ども」のどのような事で困ったか？

また保育内容「人間関係」では、図7に示すように子ども同士のトラブルについてのエピソードが多く書かれている。この傾向は過去何年も変化していないことから、その解決方法について、講義の中で学生が書いたエピソードを活用した事例検討を行うことやエピソードを通してグループワークを行い発表・解説を行うなどの方法で演習を行っている。

また、今回のアンケートで、実習前に「実習先の保育者との人間関係」について不安を感じている学生が6割、実習において、子どもや保護者との人間関係についても困りが2割程度あることから、子ども同士の人間関係だけを取り扱うのではなく、保育にかかわる広義な人間関係を取り扱い、さまざまな人間関係への不安を感じないようにしていく必要があると考える。

このように現実的な問題に直面し、その解決方法について考えざるを得ない状況を経験することができる実習は、学生にとって日ごろの授業の中で学んだ「倫理感」に裏付けられた知識をどのように実践的に応用していくかということ、実習を通じて実感し、「真の実践力とはどのようなことなのか」を具体的に考えるきっかけとなると言える。そして、1年後に現場で保育士として従事する事を考えながら、より具体的な支援方法を考える事ができる基礎力をつけるように実習後に学ぶ必要があるといえるだろう。そのそれぞれ

の方法や授業の実施詳細については今後検討していく必要がある。

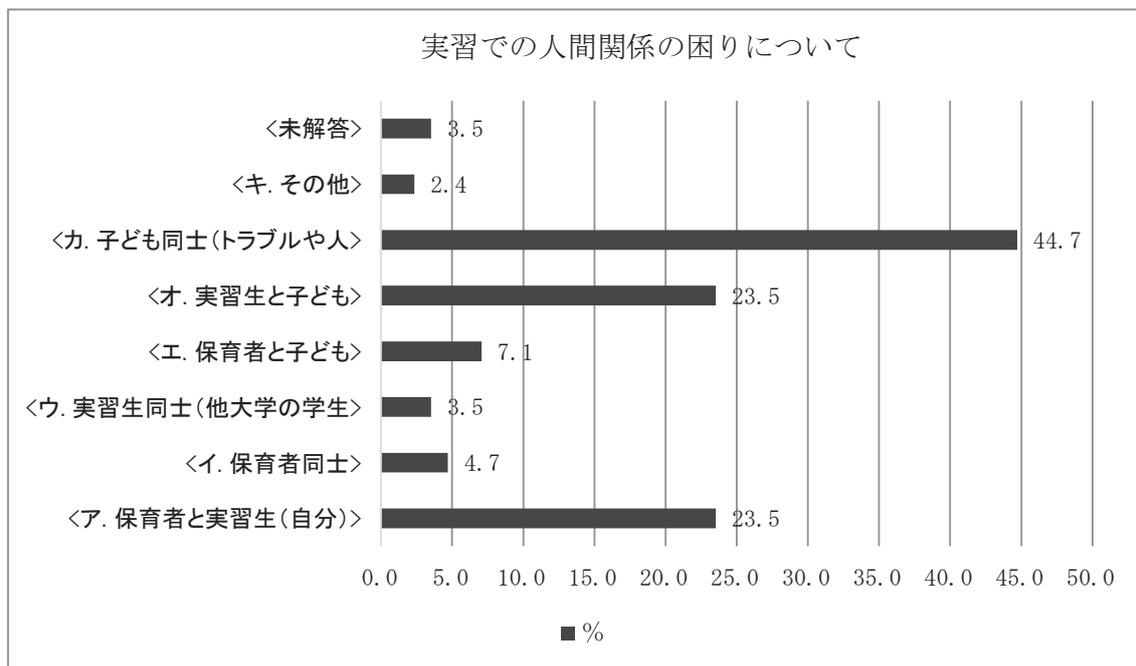


図7：実習中に感じた気になる子どもについて

また実習中に解決できない部分は、学生が現場の教員からの指導を理解できないことも考えられるが、内容によっては現場の教員も迷いながら対応していたりすることもあり、実習生への指導が困難な部分もあるのではないかと推察される。養成校での実習事前指導に、大きな意義があることは当然であるが、卒業後現場で感じる悩みや壁にも研修やケース会議を通して、現場の力を向上させ保育の質を高めていくことは同様に求められており学生の実習意義の向上にも関係すると思われる。

同様の問題は、他の領域についても当然あると思われる。そのため実習の事後には必ず、学生の感じた疑問や、困り感の調査を行い関連する科目の中で、より専門的な知識を培っていく必要があるであろう。

V、引用・参考文献

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会、「保育実習指導のミニマムスタンダード「協働」する保育士養成 Ver.2」、(2018) 中央法、pp.13-38 58-68 93-94
- 2) 岩崎桂子、「保育実習に関する不安調査からの一考察」、研究紀要、2 (2009) (小池学園) 1-10
- 2) 吉田康成、「実習不安の内容と変化(Ⅱ)」、夙川学院短期大学教育実践研究紀要、1 (2009) 31-38
- 3) 村田務、岡本美智子、小林義郎、海野阿育、「保育実習への不安状況に関する調査」、白梅短期大学教育・福祉センター研究センター研究年報、9 (2004) 13-31
- 4) 三好環、「保育実習後の学生の能力感と意欲」、畿央大学短期大学部研究紀要、26 (2005) 31-42
- 6) 矢野洋子、橋口文香、安東綾子、井手裕子、「実践力養成のための実習プログラムの構築—1日見学実習の取り組みを通して—」、九州女子大学学術情報センター研究紀要、1 (2018) 93-105
- 7) 矢野洋子、橋口文香、安東綾子、高木富士夫、高口知浩、「実践力育成のための実習プログラムの構築—1日見学実習から次の実習に向けて—」、九州女子大学学術情報センター研究紀要、2 (2019) 131-140
- 8) 河内晴美・小島玲子、「教育・保育者を目指す大学生の人間関係に関する意識：支援者としての学びを通して」、日本教育心理学会総会発表論文集、57 (0) (2015) 109-113
- 9) 佐藤達全、「大人になれない保育科学生の指導について—保育実習を通じて気づいた問題点と対応—」、育英短期大学研究紀要、37 (2020) 61-72

An Analysis of Students' Concerns about Childcare Practice I —How do they change through childcare practice—

Yoko YANO, Ayako ANDO

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In the training of nursery school teachers, the earning of specified credits in classroom lectures and also practical training are essential. Practical training is considered to be the most important principle in the idea of the back-and-forth between classroom learning and practical learning. However, it has been reported in previous studies that it may be difficult for junior college students who aim to become nursery school teachers to have a clear image of practical training, especially for the first time, and the same was also suspected in the pre-guidance for practical training given to students at our junior college as well. Therefore, in order to examine how the training guidance should be by clarifying how the concerns of the students regarding the training changes before and after the training, we conducted a questionnaire survey of students who completed Childcare Practical Training I in February and March of the fiscal year of 2020.

As a result, it became very clear that for the students, before the practical training, most of their concerns were vague and about childcare skills such as “how to write a journal” and “finger play songs and storytelling of picture books” while during the practical training, the concerns became more specific, such as “how to interact with children and clients”. In other words, before the practical training, it is beneficial to incorporate as much content as possible in the “practical training guidance” and all classes related to childcare so that students can visualize the practical training, and to also include observation practical training and volunteer activities. In addition to post-practice guidance, it seems important to give lectures and practice whether there are various methods in order to clear the questions about how to interact with children, how to deal with them, and how to support them during the practical training.

Keywords : Childcare Practical Training I, Concerns about Childcare practical training, Childcare related subjects, Childcare for handicapped children, Human relations